

地域と学生

—ラ・フォル・ジュルネにおける学生参画の提案—

Community and Students

—A Proposal on the Participation of Students in LA FOLLE JOURNÉE—

池上 奨, 直江 学美, 高山奈津紀
寺口 正義, 小林明喜子

Susumu Ikegami, Manami Naoe, Natsuki Takayama
Masayoshi Teraguchi, Akiko Kobayashi

〈要旨〉

本学では、地域社会をもうひとつのキャンパスとし、人材育成を目指している。本稿では、本年5月に、金沢市で行われた、ラ・フォル・ジュルネ金沢へ参画した学生のレポートから、学生参画の在り方を考える。

ラ・フォル・ジュルネ金沢は、期間中、石川県立音楽堂をはじめ、金沢駅前や街中でコンサートやイベントが行われ、9万人を超える入場者があった。ラ・フォル・ジュルネの特徴でもある、キッズプログラムに、本年度、本学美術サークルと人間科学部こども学科有志が参画し、大きな成果をあげた。その過程をふりかえり、地域における大学生の参画の意義、運営方法の考察と提案を行いたい。

〈キーワード〉

地域、学生参画

1 ラ・フォル・ジュルネと金沢

2008年、初めて金沢市でラ・フォル・ジュルネが開催された。金沢市は、世界で6番目の開催都市として選ばれた⁽¹⁾。初回はベートーヴェンが、二回目にあたる本年はモーツァルトがテーマとなった。

ラ・フォル・ジュルネの特徴は、「朝から晩まで9つの会場で同時併行的に45分間のコンサートが、3日間で約300公演繰り広げられる。演奏者は、旬の若手やビッグネームがずらりと並び、しかも、アーティストック・ディレクター、ルネ・マルタン氏の“一流の演奏を低料金で提供することによって、明日のクラシック音楽を支える新しい聴衆を開拓したい”という考えに基づき、入場料は5～22EURO（700円～3,000円）という驚きの低価格に抑えられている。[...]来場者の6割はクラシックコンサート初体験者で、キッズプログラムも充実していることから子供たちも多数参加している」ことにある。（ラ・フォル・ジュルネ金沢, 2009）。

2 キッズプログラムと学生参画

2-1 キッズプログラム

キッズプログラムは、子ども向けの体験型プログラムで、2008年は、地元の音楽家を中心に企画、ボランティアスタッフとして地元学生が一部サポートした。シールラリーを行い、クイズ、楽器作り、塗り絵、楽器体験などが企画された。実験的な試みではあったが、開催期間中は、多くの子どもたちが参加し、普段なじみのない、クラシック音楽を楽しく、身近に感じられると大好評となった。

2-2 学生参画

二年目の本年は、企画段階から学生の参画を模索、金沢大学の学生と、本学学生が参画した。ラ・フォル・ジュルネへの参画は、学生にとって、普段の授業ではできない体験、また自分たちが企画し、運営まで出来る学びの場である。企画には、本学の美術サークル⁽²⁾と、こども学科3年有志⁽³⁾が携わった。企画から参画した3名の学生のレポートには、地域のイベントへの学生参画の意義が感じ取られる。また、イベントに必要なものの製作と当日のサポートスタッフに、本学学生有志が35名加わった⁽⁴⁾。それら35名のうち、元々「ラ・フォル・ジュルネ」の内容を

知っている学生は1名だけであった。また、学生にとっても、クラシック音楽は遠い存在であるものがほとんどであった。

しかし、参加後には、ラ・フォル・ジュルネ金沢がどのようなものかを理解し、またクラシック音楽が身近に感じられたとの声が多く聞かれた。また、自分達で企画したことに責任を持ち、準備、運営で常に試行錯誤を繰り返し最後までやり遂げた過程、また、イベントの趣旨をよく理解してから参画した過程が見て取れる。

3 学生レポート①

3-1 ラ・ほり・ジュルネ

今回の「ラ・フォル・ジュルネ」のメインテーマはモーツァルトだった。モーツァルトの顔を親しみやすくキャラクター化したものや音符などを釣り上げる「ラ・ほり・ジュルネ」というゲームを企画した。

材料は段ボールを使用した。ダンボールは手に入りやすい素材で、切り抜きや着色など加工が簡単に出来、強度があるうえに軽いので、美術サークルやこども学科の学生が制作物の材料によく使用する。今回はダンボール本来の茶褐色を消すため、不透明水彩絵の具であるポスターカラーを使用した。ポスターカラーでの鮮やかな色づかいの音符たちは子供の目を引き、好評だった。

釣りざおは、新聞紙を細く丸めカラーテープを巻きつけた物で制作した。カラーテープを巻きつけたのは、釣りざおの補強のためと色とりどりのテープを使う事によって見

栄えを良くするためです。これに釣り糸としてタコ糸を使い、クリップを曲げて釣り針にした。

学生たちが色とりどりの釣りざおを子供たちに何色がいいか尋ねながら一人ずつに手渡していく事によって、学生と子供のコミュニケーションがより深める事が出来た。

3-2 ペットボトルカー

美術サークルのもう一つの企画は、ペットボトルカーとした。これは、ペットボトルを逆さにして9本並べて接着したもののキャップにキャスターを取り付けたもので、この遊具の遊び方は子供が乗り、大人が子供の手を引いて滑走するというものです。今回はペットボトルカー1台につき、4個のキャスターを取り付けたものを8台制作した。キャスターの取り付けは、ペットボトルのキャップの中心に当たる部分に電動ドリルで穴を開け、キャスターを差込みワッシャーとボルトで締めて取り付けた。

3-3 ペットボトルを接着する

洗浄して乾かしたペットボトル9本をセメダインで接着し、ペットボトルの透明さを活かすために透明テープで補強した。使用するペットボトルは、子供が乗りやすい四角柱の形をしたものを使用した。そして、さらに強度を高めるためにペットボトルの特に弱い飲み口部分を樹脂を流し込んで固めることにした。

しかし、樹脂が高額なため、木工用ボンドに途中から切り替えた。ところが、ボンドがなかなか硬化しなかったのでボンドに含まれる水分で石膏が固まるのではと思い、石



図1 ラ・ほり・ジュルネ制作風景



図3 樹脂を流し込む様子



図2 作品の乾燥作業



図4 流し込んだ樹脂

膏とセメントを途中で加えることにした。残念ながら石膏およびセメントで硬化したものと失敗したものが出来てしまったが、硬化したものの方は強度に優れ重量があったため安定性がよく、子供が乗っても転倒しにくいものとなった。

3-4 準備・会場設営

ラ・ほり・ジュルネは前述の通り“つりゲーム”なので、子供に理解しやすいルールを作り、ゲームを楽しく実行できるように学生たちが子供たちを導く必要があった。そのために参加する3日間のラ・ほり・ジュルネ運営のためにルールや運営方法についてサークルミーティングを何度も開き、以下の遊び方を決定した。

遊び方
・ゲーム一回につき、子供は10人（スペースやつりざおの数に限りがあるため）
・制限時間は3分間（当日のこどもの人数によって変更有）
・全部で56個ある音符などのうち20個に「当たりのシール」を付ける
・当りは20個で、午前と午後で付け替える
・当たり獲得または音符3つ以上釣り上げで景品
・景品が貰えなかった子供は貰えるまで挑戦できる
・ゲーム終了後に音符を多く釣った子にみんなで拍手
※釣りざおを振り回さないように注意を徹底

3-5 スタッフの役割分担

ゲームを行う3日間の間、毎日運営する学生が違うのでスタッフ間の役割を明確にすることを心がけた。理想は全ての学生が各係の役割を完璧に理解し、臨機応変に持ち場以外の係の補助をできる事だが、1つの係の役割を完璧にする事に努める事にした。そして、受付・整列・見回りの3つの係に最低2名ずつの学生が担当として就く事になった。

これらの事を取り決めた後、皆が役割を認識して問題なく当日にゲームを行えるようにそれぞれの係の予行演習を行った。何度も予行演習をし、ゲームのルールや役割を改善していく事は、制作の合間に行った事もあり、時間を要した。しかし、それが結果的には学生たちの息の合った運営につながった。

3-6 参加当日

「ラ・ほり・ジュルネ」は、参加する3日間ともゲームを始める前にミーティングを行い、一度予行演習を行った。ペットボトルカーについては、イベントが開かれている金沢駅地下の広いスペースの中にビニールテープを床に貼って囲いを作り、学生の目の届く場所で自由に遊べるように設置した。残念ながら2日目にはペットボトルカーが壊れてしまった。

実際に行ってみると、1日目に数々の問題点が出てきた。
・絶え間なく子供が来るので学生が休憩しにくい



図5 ミーティングの様子



図6 つりゲームの様子

役割内容	受付	整列	見回り
ゲーム開始前		・子供を並ばせる ・人数制限を超えた子供を待機させる	・釣りざおを渡す ・ルール説明 ・ゲーム開始
ゲーム中 (3分間)	・当たり付きの音符と景品を交換する ・景品を交換した子には印の付いたシールを貼る ・釣りざおを回収	・人数制限を超えた子供を待機させる	・見回り
ゲーム終了	・回収した釣りざおを見回りに渡す ・音符を池に戻す ・スタンプを押す	・子供を入れ替える	・釣った数を数える ・1位の子に拍手 ・釣りざお回収 ・次回の準備と確認



図7 受付係の様子



図8 ペットボトルカーで遊ぶ子供

- ・つりゲームの制限時間（3分間）が長い
- ・「当たりのシール」のルールが分かりにくい
- ・多く釣った子を表彰するのが難しい
- ・景品が貰えない子供がいる

これらの問題を解決するために、以下変更をおこなった。
これらの変更により2日目からは運営しやすくなった。

遊び方

- ・ゲーム一回につき、子供は10人（スペースやつりざおの数に限りがあるため）
 - ・制限時間は2分間（当日のこどもの人数によって変更有）
 - ・ゲームを行うのを時間制（20分毎）にする
 - ・参加した子供全員に景品を配る
- ※釣りざおを振り回さないように注意を徹底

3-7 感想・反省

イベント期間中に訪れた子供は約680人にのぼった。今回は短時間の中で、子供と楽しく触れ合え、予想より子供たちがゲームに熱中してくれた。また、壊れたペットボトルカーを積み木のように重ねて遊んでいる子供がいて、その自由な発想に驚かされ、「子供の心をつかむもの」は学生が予想しないものであるという事をつくづく感じた。運営については当日になって変更点がでたり、実際にやってみないと分からないことがたくさんありましたが、準備段階で何度もミーティングとリハーサルを行っていたので、状況に応じて判断し、うまく現場が回すことができました。それが、学生個々の自信につながり参画学生から、来年もあるならば是非やりたいという声が多く聞かれた。

企画・運営は概ね上手く行ったが、制作したものには反省点が多くあった。ラ・ほり・ジュールネは、釣り針（クリップ）の先端が危険で尖った形状から別のものに変え、もっと釣れ易くする必要があった。ペットボトルカーは強度をさらに強くする必要があり、加えて知育玩具のような乗り物以外の遊び方が出来るように工夫したデザインに工夫して遊具としての完成度を上げられたらよいと感じた。

これらのことを踏まえ、既製の玩具などから研究し、丈夫で子供が安全に遊べ、肉体的に発達途中の小さな身体でも使いやすいもので子供の心をつかむ、既製品ではありえないユニークなものを制作して来年も参画したいと思った。

4 学生レポート②

4-1 企画の観点

1. ラ・フォル・ジュールネは、音楽祭であるので音楽に関するものを用意する。
2. 親と子どもが共同作業できる物を用意する。
3. 子どもたちが飽きないように迫力が出る乗り物を製作する。

このような意見から二種類の企画を用意した。



図9



図10

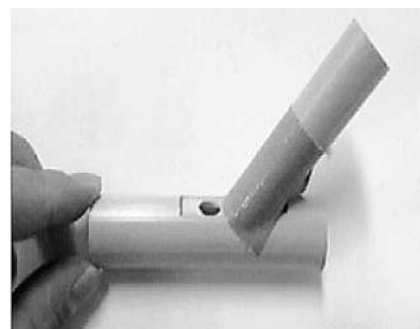


図11 完成図



図12 完成図

4-2 竹笛を作って吹いてみよう！

竹笛は、2本の竹を準備する。図9の竹は、片方の切り口が斜めになるように切る。図10の竹には、丸い穴をあける（穴の横に四角の削りを入れる）。数は、各1200個ほど用意した。

図9の竹の穴のあいた横に、斜めになっている図10の竹をあわせ音が鳴るところを探す。ボンドで固定する（固定できなければガムテープで巻く）。

4-3 ラ・フォル・ジュルネの飾り付けをした列車に乗ってみよう！

列車な主の素材は、ダンボールを使用した。ダンボールは、耐久性に弱いので何重にもダンボールを重ねた。タイヤになるものは、小さいローラーを使用した。約10ヶ所にローラーを付け、重さ、持久性に重視した。工夫した点は、飾りをたくさんつけ子どもに注目してもらえるようにしたこと、取手を付けて子どもがケガをしないようにしたこと、強度を考え、ひもを先頭につけ列車を押すのではなくひっぱるようにした。

4-4 まとめ

企画の目的は、観点にもあげたとおり親子が共同作業をして共に楽しめるような場を作ることである。このような場を作ること、親と子の間で信頼関係が生まれたり、距離が縮まり会話増えてきたりする。このような体験を子どもにさせることでコミュニケーション能力（話す・聞く・読む・書く）への習熟がはかれるといわれている（清水正男）。これは、現在、大切な取り組みの一つだといえる。

さらにラ・フォル・ジュルネは、普段のコンサートと違い、参加し楽しむことでクラシック音楽に関する知識を高めることができる。できるだけ多くの子どもにキッズプログラムを通して音楽の魅力と知識を高めてほしいと思った。

ラ・フォル・ジュルネだけに限らず、今の子どもの成長に必要なものは、このような外に出てイベントや祭りに参加し親子で共同作業をし、楽しみ、コミュニケーション能

力を高めることだと思う。

5 学生レポート③

5-1 補助の在り方

竹笛では、私たち学生は、子どもが2種類の竹を組み合わせ、音が鳴る竹笛を作るための補助をした。補助をしていて感じたことは、どうやったら音が出るのかわからないこどものために、まず出来上がっている竹笛を吹いてみせることが興味づけに大切だということだ。私達が竹笛を吹いてみせることによって、こども達は、「どうやって吹いているの?」「なんで音がなるの?」と竹笛作りに積極的になってくれた。作る際、竹笛は音を鳴る場所を最初から見つけるのが難しいので、見つけにくそうなこどもには大体の場所を示し、吹かせてみた。鳴る場所と鳴らない場所を子ども自身の目で確認させることにより、音の鳴る場所を子ども自身に見つけさせられるようにした。

自分の力だけで最後まで作ったようなこどもには、穴をふさぐコツを教える限り子どもの主体性を尊重できるようにした。

音が鳴る場所を見つけた後は竹と竹とをボンドで固定する。ボンドをつける際には、どうしても1度見つけた音の鳴る場所から竹を外してしまうことになる。そこで、1度外す際には「この場所絶対に忘れないでね、この辺だよ」等、声かけをすることにした。ボンドもできる限りこどもにつけてもらい、先に覚えた音の鳴る場所にくっつけて、乾くまでの間ガムテープで固定させた。乾くまでには時間がかかるのでキッズプログラムでの作業はここまでとした。音が鳴ってからの作業がとても素早かったことが印象に残っている。竹笛作りを通して、できる限り自分の力で作り上げようとしている子どもがとても多く、補助するにあたって、子どもが作業をしやすくするための私たちの関わり方が難しいと感じた。声かけの1つ1つで分かってくれたり、分かてもらえなかったりするので、私たちの声かけには責任があり、重要な役割があるということを考えさせられた。教える際も子どもの目線で一緒に作ることが大切であると感じました。竹笛作りは、子ども達がとても楽しそうに作ってくれ、音が鳴るとみんな笑顔になってくれた。会場の交流ホールのいろんな所からも作り終わった子の竹笛の音が聞こえてきた。

5-2 ラ・フォル・ジュルネカー

私たち学生がキッズプログラムを企画するにあたり、ラ・フォル・ジュルネのテーマである『モーツァルトと仲間たち』の趣旨に沿った乗物を企画した。乗り物にモーツァルトを描き、また、他の公演の妨げにならないように、公

演が行われていない時にのみ乗り物を動かすなどを心がけた。また、身の回りのものには様々な使い方があることを知ってもらおうと、乗物を段ボールで作ることにした。多くのこどもがモーツァルトの絵に興味を持ってくれ、また全てが段ボールで出来ていることに驚いた様子だった。

5-3 ラ・フォル・ジュルネに参画して

ラ・フォル・ジュルネを通して、今回学外の活動として地域のイベントでこども向けプログラムを企画、運営したことで普段接することのできない、子どもたちの反応や驚きに直に接することができた。子どもと接するうちに、接し方、声かけの仕方などたくさんのことを学ぶことや、スムーズに関わることができるようになった。また、教え方や学び方について今まで以上に知ることができた。私たち学生が地域のイベントに参画することで、大学で学ぶ以上に自分を含め一人一人の責任を感じるすることができた。兵庫県立大学経済学部の和田真理子准教授は、学生参画の意義を「大学として地域に貢献したい。学生らは現場の生きた学びにつながり意義があるはずだ。」と述べています。また、兵庫県住宅政策課は「まちづくりにはいろいろな主体が必要で、多世代交流を進めるためにも、学生を引き込んでいきたい」としています。(神戸新聞 1月22日)

参画する際には、自分のすべきことをよく考え責任を持ち、他の人と相互に協力しながらプログラムを作っていくことが大切であると感じた。さらに大学生として地域に貢献し、自らの学びにつなげていくことも大切であると分かった。

6 ラ・フォル・ジュルネ金沢に参加して

子ども学科におけるピアツア工房は、校区の地域連携を促進する要として位置づけ、そのシステム運用を学生が行うことによって、学校という自治体組織の特徴を知り今後の連帯のありかたを学ぶキーステーションをめざしている。そこではオープンピアツア(ワークショップ)や、幼大連携のイベントなど、様々な試みが行われてきた。

そして、本年度、ラ・フォル・ジュルネのキッズプログラムに参加することが決まった。子ども学科主催のいろいろな企画がおこなわれてきた中でもっとも子どもたちに人気のあった、釣り掘り、ペットボトルカー、トロッコ電車、竹笛作りが採用された。しかし、学内や星稜幼稚園で行う

イベントとは違い、大きなイベント会場であるラ・フォル・ジュルネでは、ある程度の完成度とクオリティが必要でありいろいろと改善が行われた。さらに、運用方法についても三日間という長丁場をいかに効率よく、整然と業務を遂行することは初めての試みだったので、学生たちもかなりナーバスになっていた。それを克服するために何回もリハーサルが行われた。それは、昨年行われたオープンピアツアの中で一回のリハーサルで本番を迎えることにより、かなり苦戦した苦い経験からの反省でもあった。万全の準備を整えキッズプログラムに参加した今回ではあるが、最初はなかなか予行練習どおりにはいかなかったが、その都度改善され、最終日にはスムーズに運営されるようになり学生たちの成長がうかがわれた。

このラ・フォル・ジュルネのような大きなイベントに参加できることは本学ならではの企画と思われる。参加できたのは金沢大学と星稜大学だけであり、貴重な体験ができた。さらに金沢大学のイベントを客観的に見る事ができ、他大学との感性の違いを知ることにより、かなり勉強になったと思われる。来年度はショパンがテーマだそうだが、ぜひ子どもフィールド演習のなかで取り組んでいきたい企画である。

注

- (1) フランス・ナント, ポルトガル・リスボン, スペイン・ビルバオ, 東京, ブラジル・リオデジャネイロに次いで金沢。
- (2) 部長, 高山奈津紀(経済学部4年), 部員 12名
- (3) 小林明喜子, 寺口正義(人間科学部3年)
- (4) 美術サークル10名, 科学部こども学科25名(3年生7名, 2年生8名, 1年生10名)

参考文献

- 清水正男「親と子そだて」上田女子短期大学児童文化研究紀要 1号, 1979年3月, 38-42頁。
- 和田真理子「明舞団地, 入居から45年 まち活性化で学生と連携」神戸新聞, 2009年1月22日。
<http://www.kobe-np.co.jp/news/kobe/0001667004.shtml>
(アクセス日2009年7月16日)
- 兵庫県住宅政策課「明舞団地, 入居から45年 まち活性化で学生と連携」神戸新聞, 2009年1月22日。
<http://www.kobe-np.co.jp/news/kobe/0001667004.shtml>
(アクセス日2009年7月16日)
- ラ・フォル・ジュルネ金沢「ラ・フォル・ジュルネとは」
<http://lfjk.jp/outline02.html>
(アクセス日2009年7月28日)